



上自太師 好家法
口交
全七冊曲其主人編 九三
南總里見八犬傳第九輯
中之卷三拾七下
中供
下子屋平兵衛板

特別
14
600
7



曲亭翁編述

八犬傳

第九輯

中套六

弓 柳川直信画



文溪堂精刊

八犬傳第九輯中快附言

八犬傳ハ文化十一年甲戌の春書賈平林堂の極元の爲第一輯の腹箱を
 思ひ起り平林堂類聚既七旬長編の刊行後果えり心許りしを
 計の書賈山青堂と譲りんと請ひ予を以て意を儘して當時稿本五卷之山青
 堂を取上げかき書直刷刷の工成り。わが年の冬物々世見りて正とる
 十二年丙子の春正月第二輯五卷と續出まじ及々世評りて喝采看官
 亦復後輯の出ると候と一日千秋の如しと云あり是より後山青堂多餘の
 故不他更に就ると云ふるに刊行等用の年同これあり第三輯五卷ハ文政二
 年己卯春正月續出第四輯四卷ハ三年度辰冬十二月發敷し
 第五輯六卷ハ六年癸未春正月續出しあけ第一輯之刊行の年より
 至りあま至り十年子年及び毎編出ると候に看官渴望せざるを
 信りて其形を其の時母に稱ひぬ。今昔を比とせざるに刊行の



南總里見八犬傳第九輯中套總目錄

第百四回 富山之餘波 敬馬奇特 刺客等谷歸順

第百五回 富山之餘波 逃客無路 老俠獻俘

第百六回 大山寺春宵 犯黑闇夜 曼讚信赴龜山

第百七回 館城之着落 里見御曹司 優還陣營

第百八回 館城之着落 義成首仁 寬刑

第百九回 妖怪之卷 八百尼山 居誘引 敗將

八百尼山 居誘引 敗將 濱路姬病牀 被冤鬼魘

第百十回	妖怪之卷	反間術妙椿遠大江	妖音響 仁辨別妙真
第百十一回	館山後卷	妖尼庭聚 歟歟兵	素藤夜龍 舊城
第百十二回	館山後卷	尊君命 清澄伐 再叛賊	旋機變 素藤易牛 狼囚
第百十三回	妖怪後卷	三匠瓶 醒里見侯	一級首術 南彌六
第百十四回	釋疑之卷	義仗 瘞元遺 言邪說	神靈懲魔 全處廿一
第百十五回	道標之卷	前百岡 大刀自裁 孝嗣	不忍池 親兵衛釣 河魚
八犬傳第九輯中套目錄終 中套十六卷各七卷共十四卷刊行			







雷
 7
 5
 4



五の
三の
七の
下



以降修煉このまじり本車このまじりるまじりゆまじりりまじりるまじりもまじり神まじり女まじり且まじり喜まじり春まじり我まじり們まじりとまじり共まじり信まじり品まじり出まじり處まじり
 不在まじり在まじり亦まじり要まじり由まじり折まじり出まじり頭まじり一まじり要まじり折まじり折まじり折まじり見まじりえまじりゆまじりゆまじり徳まじり而まじり今まじり朝まじりもまじり聖まじり神まじりのまじり
 又まじり忽まじり然まじりとまじり立まじり顯まじりれまじりるまじり小まじり可まじり們まじりのまじり宜まじりままじりけまじりけまじり徳まじりをまじりのまじり左まじり側まじりにまじり我まじり又まじり然まじりとまじり兩まじり個まじりのまじり伴まじり當まじりてまじり
 領まじりてまじり我まじり壇まじり首まじりとまじり見まじりんまじりとまじりみまじりりまじり山まじり踏まじりとまじり這まじり頭まじりへまじり来まじりりまじりとまじりあまじりんまじり折まじり不まじり測まじりのまじり寇まじりあまじり
 犯まじりしまじりままじりんまじりとまじりをまじりままじりかまじりれまじり親まじり兵まじり衛まじりのまじりあまじりのまじりちまじりをまじり分まじりてまじり料まじりりまじりてまじり件まじりのまじり意まじりをまじり
 對まじり治まじりをまじり我まじり夫まじり人まじりのまじり見まじりままじりりまじり分まじりもまじりれまじり這まじり餘まじりのまじり箇まじり様まじり々まじりとまじり訂まじり定まじりすまじりとまじり宣まじり示まじりしまじりゆまじりひまじりてまじり
 這まじり個まじり一まじり口まじりのまじり短まじり刀まじりとまじり這まじり鏡まじり鑊まじりのまじり襦まじり袢まじり一まじり領まじりとまじり小まじり可まじりはまじり賜まじりりまじりとまじり又まじり宣まじり示まじりすまじりのまじり懐まじり氣まじりハまじり我まじり
 生まじり前まじりのまじり身まじりとまじり放まじりさまじりめまじりるまじりんまじり截まじり味まじり尤まじり覺まじりあまじりれまじりかまじりとまじり西まじりのまじり身まじりのまじり護まじりりまじりとまじり錦まじり繡まじりのまじり
 襦まじり袢まじりハまじり我まじりゆまじりつまじり昨まじり宵まじり縫まじりるまじりのまじりかまじりゆまじりハまじり大まじり士まじりのまじり一まじり人まじりをまじり七まじりはまじり我まじり大まじり人まじりはまじり初まじり見まじり矣まじり乎まじり
 多まじり鹿まじり榜まじりのまじり衣まじりのまじりこまじりらまじりんまじり身まじりのまじり皮まじり之まじり下まじりにまじり鄙まじり備まじりをまじりしまじりりまじりとまじり取まじりりまじりとまじり抑まじり作まじりとまじり同まじり因まじり
 果まじりるまじり七まじり大まじり士まじりのまじり黨まじりハまじり我まじり生まじり做まじりりまじり子まじりはまじり思まじりいまじりるまじりぬまじり宿まじり因まじり深まじりれまじりゆまじりあまじりれまじりハまじり氣まじりをまじり疎まじりしまじり思まじりふまじりんまじり

然まじり他まじり們まじりのまじり躬まじり既まじり毎まじり日まじり影まじりをまじり立まじり形まじりにまじり添まじりてまじり救まじりむまじりとまじりあまじりれまじりゆまじりりまじり特まじりにまじり薄まじり命まじり也まじり
 仲まじり折まじり二まじり親まじりとまじり東まじりあまじりうまじり刺まじり心まじり五まじりのまじり大まじり腕まじりありまじり六まじり日まじり過まじりりまじりとまじり多まじりのまじり躬まじり既まじりとまじり救まじりつまじり這まじり
 里まじり入まじり領まじりすまじりままじりあまじりつまじり五まじり六まじり松まじり美まじり良まじり三まじり月まじりとまじり像まじりのまじりこまじり子まじり生まじり育まじりりまじり只まじり是まじり你まじりのまじり身まじり單まじりとまじり悲まじり死まじり
 のまじり思まじりふまじりるまじりあまじりのまじり親まじり房まじりハまじり安まじり房まじりのまじり使まじり民まじり柵まじり木まじり撰まじり平まじりとまじり後まじりりまじりとまじり我まじりとまじり我まじりとまじり
 仁まじりとまじり做まじりるまじり義まじり使まじりるまじりあまじりのまじりゆまじりりまじりのまじり料まじりとまじり仁まじり字まじりのまじり靈まじり玉まじりとまじり得まじりりまじり八まじり大まじり士まじりのまじり隊まじりにまじり
 全まじりをまじり救まじりむまじり夫まじり仁まじり義まじり八まじり行まじりのまじり人まじり皆まじり天まじりをまじり宣まじり示まじりすまじり齊まじりをまじり其まじり賊まじりにまじり誰まじりもまじり五まじり常まじり八まじり行まじりのまじり心まじり
 るまじりんまじりやまじり然まじりれまじりれまじり世まじりのまじり庸まじり介まじり通まじりてまじり人まじりのまじり私まじりをまじり迷まじりりまじりとまじり遂まじりにまじり八まじり行まじりをまじり執まじり喪まじりすまじりのまじりをまじり掃まじり
 るまじりゆまじり徳まじりれまじり世まじりのまじり億まじり萬まじり人まじりはまじり擽まじりれまじり五まじり常まじり八まじり行まじりとまじり做まじりれまじりんまじりとまじり易まじりらまじりぬまじりとまじり就まじり中まじり仁まじりのまじりをまじり
 孔子まじりのまじり觀まじり評まじりさまじりりまじりれまじり是まじり天まじりとまじりのまじり徳まじりとまじり分まじりりまじりとまじり其まじり故まじりにまじりりまじり自まじり然まじりとまじり天まじりとまじり
 叫まじり做まじりしまじり人まじりはまじり存まじりすまじり仁まじりとまじりりまじりのまじり親まじりのまじり義まじり使まじりるまじりとまじり仁まじりのまじり一まじりとまじり分まじりりまじりとまじり其まじり故まじりにまじりりまじり自まじり然まじりとまじり天まじりとまじり
 仁まじりとまじり喝まじりれまじりれまじりもまじり我まじりをまじりくまじりるまじり徳まじりとまじり天まじりとまじり分まじりりまじりとまじり其まじり故まじりにまじりりまじり自まじり然まじりとまじり天まじりとまじり

あつたをのちのちの事詳し知れぬ然るも我々の言に於ては
ひひと違身軍人なる先づ今見えず今方々不思議の計會併人
智のつとむるを皆是神女の神謀なり君の思ふに
對治せられて我身の願未だはむらぶえぬ何處の又これ復た
之れ後れ程の御言に極極と申す御樹念之思も入る御
物事いふに水と流を似く辨論表わす思も現場を人勇士の城生是ハ
大士の隨一といふもまた相貌才学自然と備へ家傳の心様言
思ひあはるるのちとて我實主いつと所々連り駭嘆し今も
いづれに御言の合はれは事程の大なるを將る御子と被合と
れ親正衛と申す身事通變を後生る言皆表は出さるる和泉
願末

是れ就
更なる

奇の武伏姫の世は種有女使事と思ひの身後の神靈住まて
多和漢の信あり願を和泉の程は長文なるる現仙境に生
神得奇果を日とるるたなは故を人たぬぬ奇とて和泉
帯言短刀我認りし伏姫が終正と身へ放さる命根を
東西をれ日姫の亡殿と俱に極に斂めて復た見る不思議
恰と云因り證据を身那病も和泉の撫息を今
何言を疑ふたの餘も思ひ合はるるあれと
されはる後事を解示る是は姫のま順るは八武士の一人の
神々不可思議感深る痛思面個の任當船船見六小水門目
所射すく忽地命を預け惜むと嘆息し然と那七殿と兄
親兵衛尉の面をく現當竹が久言矢傷ハ非は所す



身非
情

怨

と那便
陳

やうに侍深山と人となり。魏談奇話之側聞。慚愧後世。是洗季子及へ
も争ひたる神冥福併老侯の賢明仁威の俊徳なる今當害之轉し。この
祥瑞逢ふやわんや然の昔年景連と信勝の滅亡の賢之媚。邪計を
行ひ非美の利の欲す所以や。老侯の罪をさうし。我の理義を暗れた。
只仇の思ひ難き恩救を願ふ要す。或は奸賊素藤の採捕を未らぬの
隊は屬。他が與。老侯を刺す。射を資け。周武を撃つ。何んか。今
和念之轉る。圖を去。清の附人と庶民の外。身を罪輕。殺録を
加す。も仁義の君の元。元る。切ある。天神地祇も照映。あん今。所
盡談。中も願ふ。查あ。遠代。後悔の招。物れ。け。親を衛。を
ら。听了。義會。氣。老侯。辱。初。他。們。毒。箭。前。も。兒。伴。當。を
射。付。や。候。犯。を。弓。箭。を。せ。せ。權。を。引。提。す。ち。向。ひ。を。あ。ら。ぬ。思。ひ。ひ。

三
這地の依民と
やそる那

那折弓弦の断れ。神の擁護。不疑。安西麻呂の志。黒く。侯と
存。う。あ。あ。神。餘。の。逆。臣。定。色。殺。逆。も。家。亡。び。を。我。君。義。旗。之。揚。ゆ。ひ。
定。色。之。討。ひ。ん。素。も。是。も。徳。ゆ。余。も。恩。義。を。仇。と。す。監。せ。ま。せ。ん。甚。る。意。を
あ。の。義。之。憤。り。ひ。ん。や。と。の。を。神。餘。の。生。口。の。所。や。恨。み。聲。耳。を。搦。て。大江。生。々。を。我。の。來
歴。未。意。を。詳。し。ゆ。え。わ。ん。疑。念。を。解。て。情。愍。と。垂。ゆ。ひ。と。叫。び。を。一。個。の。且。ひ
や。下。の。神。餘。長。扶。介。光。弘。の。逆。習。を。け。天津。兵。内。明。時。公。第。一。天津。兵。を
四。郎。員。明。と。呼。ば。せ。る。當。手。▲。杜。木。樸。平。と。洲。崎。屋。治。と。が。謀。合。を。山。下。定。色
擊。入。と。せ。り。那。逆。臣。の。奸。計。を。聞。か。れ。光。弘。主。を。犯。す。折。我。兄。天津。兵。内。樸
平。と。洲。崎。屋。治。と。の。命。を。其。里。に。預。け。是。を。先。に。我。断。り。光。弘。主。は。一。が。逆。臣。を。樸
平。の。内。を。既。り。主。君。の。御。下。に。五。月。及。比。光。弘。果。敢。る。數。れ。ぬ。ひ。定。色。長
扶。之。樸。領。を。我。物。光。弘。主。の。流。を。な。り。と。知。り。流。罪。一。件。も。な。ら。ぬ。毒。を

久ろり 類と云ふ事幸に波少く在下物と作て情地 懸へ走り 蘇利村
 を親族許共宿し清く在り徳而月来する値に我物の氣つた生れん
 男児へ故立の落胤るもの存も亦く鞠美良む程に我物ハ時を
 竟り黄泉の事と有りた折る山下定包ハ里見の義兵討滅され又麻呂と
 守西中滅亡なる事の趣世の風聲耳にすくものから然とて還へ死家なる
 是より安房支上鮎入里見の有と有りかど神餘の子孫を尋ねて絶
 家と嗣と直りて少くも沙汰も少くも恨み思ひの許出んまはる百折
 千之磨の世を渡りて腕子七美食ひまわす腕子ハ質弱多病や且其性
 人並有ね年十五六及びて中叔と交す分ちる新風濕り弱病中
 三百六十日枕の外友も有る筆 把るるの氣力もあらずと打憎く思ふ
 貧菜餅加持呪法ハ工憑めあり 效驗る生來有て争何ハ足落世を滑

身中れが神餘の親氏と憚りて逆腕子の性者上甘理里王之介弘世と名つる
 らる果敢る時の至る候に料らと甘田素藤の招に心付く這年來
 主僕二名館山の城内扶持せし安西麻呂同列する向は素藤心服りて
 我門と云へるも弘世の性悪かり新病者なりと月俸なる年々を賤く
 先づこれこれと口を割るは足るねと在下との奇刻く使ると日毎に
 るれども這回の密議を聞き這個人を四名と集め今日老候に神
 餘の後立られしを思ひあらず文成ハ神餘の首領長坂平野と與んと
 のれし心速しく賢明徳義の良將を暴虐奸詐の首魁田の首領粗野
 非也我身ハあの終結絶絶を断るも弘世主と憐れく小根とも先づ
 神餘の祀と嗣も弘世の年来在下を盡せ 孤忠の慮も死を榮め

一世の故ひ快く目と開く一願ひやうのまのまの又の男王の后志の侠客荒城
南弥六の乾子や椿村の隠八と叫做ものぐいとのふ又隠八中隠八陳子
我克又南弥六昔年木樓平と傳定包と擊さく傍りく極々光弘是
犯と當日・擊れ言・洲崎を坂三外孫之外祖を垢三を撃れ折るを然角が
ありん上總の夷漢隔し逃去る年来と聲さつと所や伝而件の南弥六外祖が劣
らぬ使氣あり垢三を極々光弘王を死せと最酷う蓋思ひく神餘の民打
在るあが一臂の力に盡す外祖の汚名を奪んと思ひる日もあるが擊劍自打
相撲の秘まらる師は高と習ゆる聲力も人は扱れ六里の俠長と衆人二尊
敵をくめつらん一傳し程は光弘主の落膽ありとぞ知下りて遂に遠
天津氏九三四郎と交を結びて年来疎くねい今春の計謀は荷持を奪ふ

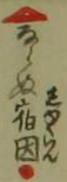
可と作ひく三個の人々と共偕は候と敷きく欲せぬ少幸の勇敵武藝の
敵はくもあらはれん幸く命を免れも他愁は漏りて因れ遠里に在るを
らへ恨も奇特と感悟くも新日まると逃去るを幸ひも他不幸
ひびとて選り招了るも義實の衆口衆意の齊一なりと所のひ
嗟嘆し恨を屋口にせりて天津氏明と衆人神力擡異の教馬記や後悔陳計
違ひもは亡君長教介光弘を落膽あり何ぞと早と傳と津田へ告新せりけん世と
やらりも義實の衆口衆意の齊一なりと所のひ
何ぞと身事と義實の衆口衆意の齊一なりと所のひ
女重時とやらりも義實の衆口衆意の齊一なりと所のひ
連る三貫り終り自滅と取りあり又景連の義實の功と媚と計を旋
ら攻滅えとせり故に己とを義實の衆口衆意の齊一なりと所のひ

瘦く枝踏の藤村の松に依れも竹筋月まを衰へて電鈴鶴算成が尚鏝鏢
 と軽健を氣力面に見れや花田の綿腸衣の裳を叩く結之白布の袖脚衣と
 て木刀を携り那南弥六を驚く細りや季立々々找之る後方は續くハ一
 個の老媪を己の鹿柄の衣を被りて近距離斬り勝ち打拵殊に精悍去りて眉尖
 刀を挟むが義實と相違なく遠くを眉尖刀を揮遣撥て聲を絶解下す河谷を俱
 我抜之が却説老翁有南弥六を素人義實と義實も目前遠く季立々々膝折
 俯さる後方は老媪も跪坐を共侶の老翁を拜しや介程の義實も主の老翁見
 為体と料り難く訝らる傷をさすや親兵衛他何れ原是是是磨る者や和郎
 と親しく相識りし他も亦遠山に年東住や熟きや八衛門和郎同宿の者もあ
 れは徒然あつとよひのこや具へるな古又同かやと思ひるが他も又紛れ果す
 人なれば怪しむるあつとよひの老翁を信とせむや。され老人親兵衛と山居同宿の者

親兵衛と親兵衛
 と共宿の主君と

有る近く找し親末の詳さゆえわか。快くと扇を連子拵にあり老翁を
 阿と云ふ先南弥六を。見よ目今幸遊年々。高身邊找り老媪中後で跟さる
 たる近く程は夏目南弥六と又拵下す。左右に守護さる。岩下老翁の茶
 義實主は朝にさし相い親を衝き頭を指さすや。今徳瀨子達さるせよ
 賤し我々が貴人近き者さる。親のめをさると。弥勃の世ま。有わると喧
 けれも直上上三三長も庫るれ。最もぬ身の死や又世目見す。小可ハ大山道
 節忠義の父さる。大山道策。誰借僕さ。初姓名ハ姓雪。與四郎後。根原又
 加介。借平と強れ。あやふえ。又此侍。多を根原。名を音音と強く。神
 道節の初母さる。及せぬ。今も六徳前。秋茶月の初旬。我見十條力三郎
 及る。年尺八郎ハ武藏豊嶋の戸田河。大士と追隊の六敵を。遠望。戦て
 竟し戦後。侍の打。音音ハ兩個の。根原。或。單。節。世。不。得。上。老。翁。

嬋娟言一個の神女最たる大の背の尻を掛けて出現あり小可と音音を制
 めり若くは是忠臣節婦天助感念を命を戦波をへて是を推れと宣
 示し大子の舞之被被を命可の夢終可且駭れ且感激し音音の傳
 る麻葉を携るを賦て中天へ被登されて忽然と黒白も知るをすけ徳而
 詰朝多へ小可も亦音音もをく我を復り共信も身て起し被罵れを
 四下を顧み怪し自身這深山に在り水に織々奇品の間流れ松の音々
 涼風の秋の空を異草地に満り観覧を花聲を以林鳥梢に集り耳環に聲
 々是を意外の奇観るを多るをるを年四五の穉見の一人山崖の内
 存り草花を而女子を餘念をあらえすけ登時小可們思ふや原來身の真
 土に到り這頭を置りめを被感念に前面を谷川の谷の口順にせざる塞の河原に
 ありんか若ららそを穉見一個這頭を在りあり七歳未滿の穉見も死を



あはれ同話人と尋思とを夫婿情を地を商議を俱に山崖の頭を
 喃和子よ又同ん這里に竹麻那地を這山の名は何とらん倘あり論を和
 子亦何を被擡這頭を置り其由あり甚麼をやと向ハ穉見の母
 多るを公判のいさか知るを這里に女房の山二十餘あり前ハ比里見の息女
 伏姫上の山居るをひり果の夕に伏のり則這山崖を婿も亦這里に在り我も
 則公判の故王大山道に節忠與和と大なる八丈士の隨一人大江親兵衛仁之過日我身
 下惣官市河の頭を首様をの大元あり伏姫神の救をひて這山へ還り来り
 隔昨五日のり其あり合宿姫神の傷を在り慰めを被然るを這里に在り
 昨日公判を猛火の内を被り這里へ領て来りひり亦姫神の真助るを身の被りて
 面をさやとりて大に備り且過去を懐て未來を辨論音々出まるとり世また
 あるをすねり且養育に且懐てを夫婿を被りひりあを神の穉見を導りて

伏姫
すま
え



かろあふた
世のついで
そとあひた
あまのま



あまのま

いハク身入ん。こひまはれが護る。原來一死身の五丈達の噂を聞きし所知る大言の
子でとぞ牧神女の那里に在るかと問ふ彼方か指すに那に那里に在るかと
教へるも可と音音が視れ見えぬ多も深信のや胆を銘く赤たけ限りなれ
其方朝ひ身を殺傷しと黒梅の時の程を覚むやと頭を拾れ親を衛つた
又いふ神の真助の翁夫婦は是兩個のとき五丈士の恙なく宵隊を免れ
又又兩個の娘婿申すも單節も昨日申すも導れや茲の天塚の頭子存那里に
快えと又指す語られ小可音音共信の存馬高良權判りも多々慌惑ひ
の岳山居頭へけ。塚下へ走らる共信もそれ果て申すも單節の昨日乗くる馬
と信す呼吸絶くる馬の上へは多々多々誰何とさる駿驥公兩個へ申すも單節が
騰けれを解索とさる解捨を抱れ下へて看るも身子受るに候はる情むべ
件は駿馬の戸門大腹に。銃傷言ふ又復足之蹄走血を衣に死なる下下此

あふと

れ。カ二尺八寸管を込め。大切に思ふ波々と共信も申すも單節がてと
又又胸脇を拵試す寸口の脈をさすも高絶え。鳩尾温るれ。又
兩個も兩個の娘婿を捉え。へ膚直る。石滴と口は決れ。神女も真助と只信も祈を
喚活を。程を敷く。申すも單節も忽然と懸生る。奇信もを。訝疑ひ。又申すも
と申すも。遠地方に聚合す。我信も。伏魔神の靈驗真助の蒙る。萬死に
出。一生を得て。あの山に木ぬ。車の傾。又邪大江神童死を。神女も救ひ。け
本月の五日より。山の山。岳山。置。と解。示。其。言。疑。を。解。か。し。を。醒。す。
奇。話。珍。説。の。尾。ま。た。簡。約。に。述。ぶ。り。越。子。初。身。の。程。方。と。神。の。擁。護。を。格
せ。事。情。を。知。り。和。女。們。の。昨。来。の。五。丈。の。深。痕。を。死。な。り。成。十。里。の。這。山。へ。来。り
駿。馬。の。戸。門。も。亦。神。女。の。真。助。や。世。に。有。る。再。會。日。皆。是。神。の。恩。徳。之。工。夫。也。思。ひ
あふと一五一。解論。六。鬼。の。單。節。の。所。に。每。五。丈。重。江。の。亦。惶。と。齊。一。空。と。い



様
美れ

淨
支がらる

孫們共信
支がらる

藤が及逆の事の題末并に海曹司美道吾の御影彫の趣を言話急迫く解知る
又神と云ふ事自は後集巻折首標全の先を推せん多き大江親兵衛子對に
分若們中の折首を老候に見せし御恩の厚り今も海に身を
れい道郎自餘の犬士初再會必遠く陽世幽真隔れ是方永く別れ
去の毛と遠る侍と神女の仰かるといれれ音音自電の單節も皆
誓ひて遠く漱江線香と燈火身と淨く那里に在る知れぬも
わも論々大家共信小侍の辨ら見別れ惜を隨に感涙の集積袖濡れ
時を待て今日老候に意故に女に對治せと精悍しく再装束
林鹿路投り支がらる有製業の心を
あをまぬ折逃はひ一個の心足る
あをまぬ折逃はひ一個の心足る

かきわらふ
あひん一家の家
と面
まゆり

組伏せと索と掛ひは他身子受と撲傷の疼痛や堪へられん老人は敵
志ぬやや及が信而遠也思ひ今遠くへ去る程
や火は生に捕られり
あひん一家の家
と面
まゆり

天保六乙未年春二月廿四日
本文廿五頁稿了序目端像
八月中旬追稿成

著作堂子集

筆
福硯
大吉利
市